

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

II.家族との支え合い

III.地域との支え合い

IV.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
ジャンプ 評価の公表で取り組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 3 年 7 月 1 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 16名	(依頼数) 18名
地域アンケート回答数	6名	

※事業所記入

事業所番号	3873600450
事業所名	グループホームあまご
(ユニット名)	どじょっこ
記入者(管理者)	
氏 名	藤澤邦哉
自己評価作成日	令和 3 年 3 月 23 日

【事業所理念】 1. 何事も決して急がず、利用者のペースに合わせて行動します。 2. 常時、会話に心掛け、利用者が安心して生活できる環境作りに努めます。 3. 地域の人とのふれあいを大切にします。	【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】	【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】 自然豊かで、とても静かな環境にある事業所は、畑で採れた野菜を差し入れてくれる地域住民や、主体的に考え行動ができるチームワークの良い職員に見守られながら、利用者が穏やかに生活を送ることができている。事業所では、「利用者がどうしたいのか、気持ちよく過ごすためにはどうしたらよいのか」を最優先に考え、そのために職員一人ひとりがしっかりとスキルアップにつながるよう、努力を惜しまない様子がとても印象的であった。また、事業所では、職員間で検討を重ねて、タブレットでの記録などの「オンラインシステム」を導入し、様々な機能を活用しながら、職員間の確実な情報共有にも役立っている。さらに、現在のコロナ禍において、外出や面会制限を設けているものの、オンラインでの面会を取り入れたり、フェイスブックなどのSNSを活用して、利用者の様子などの情報発信したりするなど、遠方の家族などからも喜ばれている。
---	--------------------------	---

評価結果表

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅰ.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	職員の思い込みにならないよう利用者様との会話や行動、態度を通して把握に努めている。	◎		○	日頃の暮らしの中で、全ての職員は利用者の思いや意向の把握に努めている。管理者は、「利用者が思いを上手く表出できないのではなく、職員が上手く引き出せていないだけ」という認識で、職員のコミュニケーション能力について注視している。また、職員間の能力差はあるものの、聞き取りやコミュニケーション能力に長ける職員が中心となって、利用者の思いを引き出せるよう取り組んでいる。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	身体や精神状態の確認をもとに、どのようにしたら気持ち良く暮らせるのだろうか検討、ケアの実施、改善を行っている。				
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	面会や電話、手紙などで家族様などとコンタクトしている。				
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	○	ヒントになるような発言や態度、行動を記録して共有している。				
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	決めたサービスが利用者様にとって良いのかどうかは実施してみないと分からない場合もあるのでその時は、柔軟に対応している。その時その時の思いの変化にも注意を払っている。				
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	○	事前調査や入所後の本人様や家族様との関わりで情報収集している。			○	事業所の開設当初からと比較すると、最近では入院先や別の施設から移ってくる利用者が増え、自宅から入居する利用者は少数になっている。職員は、利用者や家族から聞き取りをする生活歴やこだわりなどの情報のみに留まらず、入居前の病院や施設などの支援者からも、積極的に情報収集をしている。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	○	定期的なアセスメントと日頃のケアの中で把握に努めている。				
		c	本人がどのような場所や場面で安心したり、不安になったり、不安定になったりするかを把握している。	○	排泄、飲食、睡眠状況、人との関わりなど生活のあらゆる場面で把握に努めている。				
		d	不安や不安定になっている要因が何かについて、把握に努めている。(身体面・精神面・生活環境・職員のかかわり等)	○	記録した情報をもとに分析、改善への取り組みを行っている。				
		e	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握している。	○	24時間時系列での記録をとり把握している。				
3	チームで行うアセスメント (※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	担当者会議だけではなく、事象を常時、本人様視点で捉えチームとしてサービスを提供する習慣化を行っている。			○	最近導入された「オンラインシステム」を活用して、職員一人ひとりが丁寧に書き留めた利用者の日常の様子が記録され、会議などで情報共有のうえより良いサービスを検討している。また、「オンラインシステム」の中には、情報共有のための便利な機能がいくつもあり、サービスの実施状況を記録すると、介護計画の内容にも連動するなど、同システムの導入により確実な情報共有に役立っている。
		b	本人がより良く暮らすために必要な支援とは何かを検討している。	○	計画作成担当者、ホーム長、担当者、医療機関関係者を中心に担当者会議で検討を行っている。必要に応じて家族様への相談や情報提供依頼を行っている。				
		c	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題を明らかにしている。	○	計画作成担当者、ホーム長、担当者、医療関係者を中心にチームとしての課題、目的共有、明確化を行っている。				

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
4	チームでつくる本人が より良く暮らすための 介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	計画書第2表の作成は、まずは、本人様の思いや意向が記載されておりそれをもとに実施内容が作成されている。				利用者毎の担当職員や医療関係者、ホーム長、管理者等でカンファレンスを実施し、日常的な職員の記録から利用者の思い等をくみ取り、介護計画につなげている。また、計画作成担当者がまとめて介護計画を立案を作成し、家族等に説明している。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	サービス実施についての自己評価及び担当者が行う計画書への評価、担当者会議での計画作成担当者やホーム長、担当者、医療関係者でそれぞれ意見を交換を行っている。家族様にも話し合った内容を伝えている。	○		○	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	重度の線引きや定義をするのではなく今の状態をありのまま受け入れ状態の維持や改善についてチームで話し合い計画書に反映している。				
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	△	一部の利用者様には計画書内に記載はされているが、記載しなくても家族様や、地域の資源は本人様支援の為には必要だと考えている。				
5	介護計画に基づいた 日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	○	ケース記録に添付しており常に把握や確認が出来る状態である。			○	事業所では、職員間で十分な検討を重ね、最近「オンラインシステム」を導入している。職員間においても、システム活用のスキルの差はあるものの、一人ひとりが熱心に入力作業に取り組み、利用者との会話など日常の具体的な様子も記載することができている。また、介護計画の目標に沿って、日々の支援内容を入力し、記録に残すことができている。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	計画に番号を打ち、ケース記録を記入するときにその番号を記入することで実践状況が把握できる仕組みにしている。また、定期的に、職員が自己評価を行い自分の実践状況を振り返る機会を得ている。			○	
		c	利用者一人ひとりの日々の暮らしの様子(言葉・表情・しぐさ・行動・身体状況・エピソード等)や支援した具体的内容を個別に記録している。	○	全てを記録するのは非合理的でありケアに混乱をもたらすと思います。計画書に基づいたことに対しては、場面場面での様子を個別に記録している。その時の利用者様、介護者の発言内容を記録している。			○	
		d	利用者一人ひとりについて、職員の気づきや工夫、アイデア等を個別に記録している。	△	お一人様お一人様に対する気づきやアイデアは、ホーム長や計画作成担当者に相談できるようにしている。			○	
6	現状に即した 介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	◎	定期的に行っている。			◎	利用者の状態等に変更が見られた場合には、すぐに介護計画の見直しをしている。事業所では、「利用者の状況が変わらない、目標が達成できないのであれば、計画の内容が不適切なのではないか」との考えがあり、内容を見直すよう配慮している。また、日々の暮らしの中で、利用者の介護計画の内容と違う状況になった場合にも、職員間でしっかりと話し合い、利用者にとっての最善のサービスを考え、臨機応変に対応している。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	×	日々が現状確認であると思います。そのことから、迅速に対応の変化を現状に合わせるのは当然でありわざわざ期間を設ける必要はないと考えます。			○	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	◎	明らかに介護計画書が機能しない場合は、緊急に会議を行い新たな計画書を速やかに作成している。			◎	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	◎	開催している。			◎	担当者会議やケースカンファレンス等は、利用者毎の担当職員と管理者、ホーム長に加え、法人代表者でもある医師または訪問看護師の参加を得て開催している。職員は、医療関係者に気軽に相談や確認をすることができ、大きな安心につながっている。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	○	それぞれの職員が自分がケアを行ってどうであったかを情報を提供している。エビデンスに基づく意見交換を行っている。全体での会議では一人一人が発言の機会を持っている。				
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫している。	×	議題によって参加者を限定している。勿論、全員参加の会議もある。また、リモートでの参加も行っている。全員で会議をするのが目的ではないことに留意しつつ、ホーム長や計画作成担当者が職員個々の意見を吸い上げる仕組みにしている。				
		d	参加できない職員がいた場合には、話し合われた内容を正確に伝えるしくみをつくっている。	◎	話し合われた内容は、ノートやデジタルにて申し送りを行い共有している。			◎	
8	確実な申し送り、情報伝達	a	職員間で情報伝達すべき内容と方法について具体的に検討し、共有できるしくみをつくっている。	◎	情報伝達の手段を複数持ち内容によって選んでいる。			◎	事業所では、「オンラインシステム」を導入したことにより、強調したい項目を赤色で表示にしたり、画面を切り替えても表示を継続できる設定にしたりするなど、便利な機能を活用している。また、内容によっては、ノートに手書きするタイプの申し送りも残しており、その場合は、職員の確認後に署名することで閲覧済みの確認をしている。
		b	日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	○	重要な事柄に関しては口頭ではなく何らかの記録で行い確実に伝わるようにしている。	◎			

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切にしたい支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	△	その日その日ではなくその時その時の意思決定(把握)を積み重ねていく努力をしている。				事業所では、「伝えることが難しいだけで、どのような状態の利用者も自己決定ができないわけではない」という考えのもと、選択できる機会を設けるなど、職員は利用者の意向に沿った支援を心がけている。管理者は、「職員からの尋ね方や声をかけるタイミング、表情や様子から思いをくみ取る能力のスキルアップが必要である」と感じている。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	◎	提案はするが決めるのは本人様自身であるという立場で日々関わっている。			◎	
		c	利用者が思いや希望を表せるように働きかけたり、わかる力に合わせた支援を行うなど、本人が自分で決めたり、納得しながら暮らせるよう支援している。	○	利用者様一人一人がそれぞれ自尊心を大切にしながら暮らせるように職員はコミュニケーション技術の向上、ホームとして出来る事の間口を広げるように努めている。				
		d	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切にしたい支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	△	利用者様の視点に立った緩やかなルールの中で支援を行っている。ルールから外れたとしてもそれを受け入れられる寛容な雰囲気づくりに努めている。職員側の都合や決まり優先という言葉は非常に失礼な言い方だと思いますので止めてください。				
		e	利用者の活き活きた言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	喜び楽しみだけでなく色々な感情表出が引き出せるようにコミュニケーション技術(傾聴・共感・リアクション等)向上に努めている。			○	
		f	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	○	その困難は、利用者様だけに原因があるのではなくケア側の態度や技術等に課題があるという認識の下で意向の表現や意思決定支援を行っている。				
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切にしたい言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。	◎	それについての意識の浸透と向上のために、会議を行い自己点検やお互いに言葉遣いの事について意見を言い合える職場作りにも努めている。	◎	◎	◎	事業所では、日常的に当然のこととして、職員が利用者のプライバシーに配慮した支援を行っている。また、排泄介助時に、職員が利用者に寄り添う場合には、タオルを使用して目隠しにするなどの工夫もしている。
		b	職員は、利用者一人ひとりに対して敬意を払い、人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮しており、目立たずさりげない言葉がけや対応を行っている。	○	場合によっては他者様たちの前で大きな声で声をかけないといけない場面もあるが、会議で自己点検実施したり嫌な思いをさせない声の掛け方や介助の工夫についての検討会や許容範囲の線引きを行っている。			○	
		c	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	○	一つ一つ声をかけ同意を得ながら排泄介助を行ったり排便の確認などはさりげなく声をかけ行っている。個浴による入浴介助を実施している。				
		d	職員は、居室は利用者専有の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	○	利用者の状態に関係なくノックまたは、声をかけて入室している。また、居室に居ない場合にであっても本人様の同意を得て入室をさせてもらっている。			○	
		e	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	◎	職員は守秘義務の誓約書に署名しており遵守している。また、職員同士でやりとりするプライバシーに関わる内容は本人様や他者に聞こえないよう配慮を行っている。				
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けってもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	◎	互いを尊重し合うことで、お互いに感謝の言葉が出る関係づくり、また、意思決定や同意を大切にする事でお互いの立場が対等であることを伝えている。				職員は、利用者の性格や相性などを十分に把握しており、その上で一人ひとりが穏やかに過ごせるよう配慮している。また、事業所では、多少のいさかいが起こるのも自然なことと捉え、職員は利用者同士のトラブルが長引かないよう支援している。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	○	理解しているが、協調性や全体性を重視しすぎるのは、個別の暮らしの充実とは相反するので折り合いが難しい。				
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等)。	○	利用者様の個性や他者様との相性などを把握できている。また、コミュニケーションや身体精神状況が異なることを踏まえ無理のない緩やかな共存関係の構築が出来ている。あくまでも個々への尊重であり個々の権利優先であるからして誰かを世話役的に考える事は非常に危険な考え方だと思ってしまうようなことは実施していません。			○	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	◎	予測に基づき未然に防げることは防ぐ。トラブル時は、職員が裁くのではなく、必ず当事者様の話をまず聞きその思いや相手に伝えたい気持ちに共感を行っている。				

愛媛県グループホームあまご

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
12	馴染みの人や場との関係 継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係について把握している。	△	事前聞き取りである程度把握できている。自らのコミュニケーションを通じて更なる引き出しに努める職員と情報を与えられるのを待つ職員がいる。				
		b	利用者一人ひとりがこれまで培ってきた地域との関係や馴染みの場所などについて把握している。	△	事前聞き取りで地域とどう関わってきたかやよく行っていたお店や病院などについては把握できている。それ以上に関しては職員ごとに差がある。				
		c	知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていくなど本人がこれまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	△	現在は、外出してその場所を訪れたり、人との親交を維持するような支援が出来ていない。				
		d	家族、知人、友人等、本人の馴染みの人たちが、いつでも気軽に訪れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	△	以前はそうであったが現在は、訪問の制限があるのでそのようになっていない。				
13	日常的な外出支援	a	利用者が、1日中ホームの中で過ごすことがないよう、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない) (※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	○	寝たきりの方を除いてすべての利用者様の施設周りの散歩支援を行っている。その方の希望に合わせて歩く距離や赴く場所を選んでいる。 (※職員の都合という文言を軽率に使うのは止めましょう。)	○	○	○	現在のコロナ禍の感染症対策として、買い物に出かけるなどの外出できる機会は減っているものの、日常的に、利用者が事業所周辺を散歩できるよう支援している。事業所では、利用者の意向を最優先させるため、全ての利用者が揃って外出することはあまり想定していないが、利用者の状態に関わらず、気持ちに寄り添い、利用者のペースで出かけられるよう支援している。
		b	地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	×	現在の状況では行えていない。そもそもそのような地域資源がない。				
		c	重度の利用者も戸外で気持ち良く過ごせるよう取り組んでいる。	×	施設周りの散歩の支援は行っている。			○	
		d	本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら、普段は行けないような場所でも出かけられるように支援している。	×	していない。				
14	心身機能の維持、 向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	理解の幅はあるが、あらゆる因子を検討し環境を整え引き起こさないよう取り組んでいる。				利用者毎に、できることやできないことについて十分にアセスメントをしており、職員は利用者自身ができることや選ぶことを待つ支援ができてい。また、「できる、できない」にかかわらず、利用者自身がやってみたいことや参加したいことに対して、職員は積極的に支援をしている。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	○	運動や遊び、身の回りの事などその方に合った取り組みを通じて予防を行っている。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	○	個々の状態を見極め、押しつけや過介護にならないよう取り組んでいる。	◎		○	
15	役割、楽しみごと、 気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	○	利用者様個々のそういった情報は把握した上で、今、どのようなことで楽しい気持ちになれるのか、嬉しい気持ちになれるのか検討している。				職員は、利用者一人ひとりが思い通りのペースで楽しく過ごせるよう支援している。事業所では、「利用者に出番や役割を作る」という形で支援することなく、利用者が自ら希望して行った事柄について、その都度職員が感謝の気持ちを伝えることで、利用者のやりがいや生きる源として、喜びを感じてもらえるような配慮をしている。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	○	全ての方が役割や出番があるわけではなく、またそれを欲しているわけではないということを踏まえて、何かが出来るからという判断ではなく自らしたいという自己判断を尊重しながら楽しみごとや役割の支援を行っている。	○	◎	○	
		c	地域の中で役割や出番、楽しみ、張り合いが持てるよう支援している。	×	支援していない。				

愛媛県グループホームあまご

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみや おしやれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つととらえ、その人らしい身だしなみやおしやれについて把握している。	△	全ての方の把握はしていない。				利用者によっては、気に入っている服装や着心地の良い物を繰り返し着たい時もあるため、職員は清潔感を保ちながらも、利用者の思いに沿った支援をしている。また、職員は利用者の状態に関わらず、積極的に着替えを促す声かけをするようにしている。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みで整えられるように支援している。	△	把握できている方に関しては支援できている。また、家族様を選んできてきていただいた服や持ち物を使用できるよう支援している。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員と一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	判断力の度合いに応じて、一緒に選んでいる。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせたその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	◎	タンスの中の入替えを季節毎に行い、季節に合った服装が出来る支援を行っている。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にせず、口周りを綺麗に保つよう指導している。（髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等）	○	あからさまなことをせずに清潔感を保った身だしなみが出来る支援を行っている。	○	◎	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	◎	希望がある場合は送迎や支払いなどの支援を行っている。ホーム内での理容においても相談しながら行っている。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	気持ち良さや楽しさ、清潔感を見ながら支援を行っている。			○	
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	○	生きる上での楽しみであり、心身の健康を保つために必要であると理解している。				利用者の好みや意見も取り入れながら、管理者が献立を考え、ユニット毎に職員が交代で調理をしている。調理が不慣れな職員には、他の職員等が具体的に味付けの調整のアドバイスをするなど、適切な支援を行っている。地域住民から野菜の差し入れをいただくことも多く、旬の食材を使用しながら季節を感じられる食卓になっている。また、職員も同じ食卓で、利用者と一緒に食事を摂っており、会話を楽しんだり、食の好みを把握したりできる機会にもなっている。さらに、献立については、偏りがないように配慮し、職員等からの意見をもらうことができている。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	△	台拭きや下膳は一緒に行っている。その他の事に関しては行っていない。今は、その活動を望む利用者様は少ない。個々の主張に配慮しつつも主張しない方の事も配慮している。			○	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	△	丁寧をお願いしたり、感謝の意を伝えてはいる。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	把握はしている。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって昔なつかしいもの等を取り入れている。	○	畑で採れた野菜や近所の農家の方に頂いた野菜をふんだんに使ったり、芋ご飯やだんご汁、季節の山菜など昔食べていたであろう食事を取り入れている。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせた調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。（安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いりどりや器の工夫等）	○	誤嚥性肺炎の可能性と相談しながらの食事形態を検討している。見かけだけではなく、基本のhot is hot, cold is cold を実践している。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	それぞれ模様や材質など違ったものを使用して頂いている。			○	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	◎	一緒に同じものを食べている。要介助者の介助をしつつも周りに配慮しながら声かけを行っている。			◎	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	○	働きかけの声かけや、何が出来ているのだろうかと一緒に考えたり、一緒に食前体操を行い食事の時間が近づいていることを意識して頂く配慮を行っている。また、オープンキッチンなので匂いは直ぐにリビングに漏れると思います。	◎		○	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べれる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	○	病状や体型などに配慮しながら水分や食事の摂取量を調整している。				
		k	食事が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	好きな飲み物にしたり、時間をずらして食べなくなるのを待ったり、一度に飲むのが負担な場合は、回数を増やしたりしている。飲んだり食べたりすることが本人様の精神的負担にならないよう配慮した支援を行っている。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	○	献立作りは、管理者が行い出来た献立に関して各職員からのコメントを受け修正するようにしている。栄養士のアドバイスは受けていないが、炭水化物ばかりにならないよう配慮している。			○	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	○	毎日、まな板や布巾などの消毒を行っている。冷蔵庫の掃除や納品時に在庫食品の確認を行い清潔や鮮度を管理している。				

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	◎	勉強会で学び必要性や重要性について理解できている。				職員は、利用者の口腔内の状況を把握し、必要に応じて訪問歯科診療や外来受診につなげている。口腔内の状況についてはアセスメントシートにも記載されており、受診や口腔ケアの介助の有無などを記録している。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	○	付き添い、必要な介助を行い把握している。			○	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	△	トラブル時は、外来または訪問歯科受診を受け指導して頂いている。				
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	○	義歯を使用している利用者様に対しては毎日磨いているかどうか確認している。				
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないよう、口腔の清潔を日常的に支援している。 (歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック等)	○	トラブルが起きやすい方に対しては特に行っている。			○	
		f	虫歯、歯ぐきの腫れ、義歯の不具合等の状態をそのままにせず、歯科医に受診するなどの対応を行っている。	◎	トラブルを見つけたら外来または訪問歯科受診を行っている。				
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	○	理解している。				入居後に、職員が声かけやトイレの利用を促すことなどにより、オムツから紙パンツに変更したり、パッドが小さい物で済むようになったりするなど、改善が見られた利用者もいる。最近の排泄用品は性能の良い物も多く、利用者の状況に応じて、相談しながら紙パンツやパッドなどを変更することで、利用者の履き心地が良くなったり、薄くても吸収量が多い性能が良いパッドを使用したりするなど、利用者に合った支援をしている。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	理解している。				
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	○	概ね把握している。記録を行い共有している。				
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	○	その時の状態を把握してトイレでの排泄支援に取り組んでいる。最近では、入所時から紙パンツを履いている方が多い。	◎		○	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	排泄そのものや排泄に至る行為、食事や水分などに注目して改善の取り組みを行っている。				
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	記録をもとに把握に努め誘導を行っている。				
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	△	自立されている方は自分で選んで選んで載っているがそうでない場合は職員が十分吟味して選んでいる。適切かどうかの確認は頻繁に行っている。気になる家族様に対しては報告するようにしている。				
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けている。	○	個々の状態に応じて使うものを検討し導入している。				
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	△	運動を取り入れたり、食物繊維の摂取、夏場の水分摂取量を増やすよう試みたりする程度である。				
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)。	×	曜日や時間帯などは、施設側が指定している。指定することは合理的判断ではないでしょうか。一人一人の好みを把握して入浴支援を行っている。	◎		○	職員配置の関係もあり、事業所で事前に入浴計画を立て、利用者が順番に入浴できるよう支援している。入浴拒否のある利用者や対応する職員の交代などには個別に対応しており、できる限り利用者の意向に沿った入浴ができるよう心がけている。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分に入浴できるよう支援している。	△	時間に追われて支援している中で最大限の配慮を行っている。				
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	○	勿論そうではあるが、浴室は、事故や健康状態急変の確率が高い場所であることを考慮しながら一人一人に支援を行っている。				
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせずに気持ち良く入浴できるよう工夫している。	◎	原因や理由が毎回同じとは限らないので都度本人様の気持ちや意向を伺い清潔維持との天秤をかけながらどうしてもという時は粘り強く対応している。				
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	◎	入浴前にバイタル測定を必ず行っている。浴後の経過の見守り、水分補給を勧めている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	◎	把握できている。				日中の過ごし方などを試行錯誤しながら、介護面でできる限り、利用者が夜間に安眠できるよう工夫している。夜間の安眠が難しい利用者には体調面を考え、主治医と相談して内服薬を処方してもらったり、必要に応じて、精神科へつないだりすることもある。また、事業所では、利用者自身がつらい思いをしないことを最優先に考えて、対応している。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	食生活や排泄、日中の活動量など把握を行い原因を探っている。その都度、生活リズムを整える試みを行っている。				
		c	睡眠導入剤や安定剤等の薬剤に安易に頼るのではなく、利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	◎	そこに至るまでのプロセスを守った上で、つまり原因や状態、健康状態の悪化リスク等を把握して改善の取り組みを行った上で効果の無い場合は医師と相談して眠前薬や安定剤の処方を受けている。			◎	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	個々の状態に応じて休息を支援している。				
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	◎	希望が無くても本人様に家族様とのコミュニケーションを望む兆候があればこちらから勧めている。家族様にも協力の呼びかけを行っている。				
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	○	掛けることや書く能力のことは手段であり大切なことではないと理解している。各利用者様に対して必要に応じて家族様とのコミュニケーション支援を実施している。				
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	○	本人様の要望や状態に合わせて電話をかける場所や取次等の配慮を行っている。家族様にも協力して頂いている。				
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	○	本人様の状態に合わせて、手紙の内容を伝えたり写真付きの場合は飾ったり、お礼の電話を勧めたりして支援している。				
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力をしてもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	◎	出来ている。				
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	理解できている。				
		b	必要物品や好みの買い物に出かけ、お金の所持や使う機会を日常的につくっている。	○	各利用者様によってお金に対する価値観の違いを把握して使う場面への支援を行っている。				
		c	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	○	近くに店が無いので定期的に巡回する移動販売を利用して頂いている。				
		d	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	×	決めつける以前の話として、お金の怖さを理解している施設の対応としては、入所時にトラブルの事例を伝えて個人でのお金の所持はお断りしている。				
		e	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	所持については認めていないので相談していないが、どうしても所持したい場合は施設側が責任は負わないとお伝えしている。使い方に関しては頻繁に相談している。				
		f	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしておき、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	◎	得ている。				
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々々のニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	他科外来の付き添いや急な受診時の付き添い、入退院、入院中における支援、療養マッサージの受け入れなど本人様の諸事情に合わせて出来るだけ対応している。	◎		○	家族から外来受診の付き添いの希望が多く、職員が対応することで大変喜ばれている。今後も、事業所として、可能な範囲で利用者や家族の希望や要望に、柔軟に対応していく予定である。

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(3)生活環境づくり									
25	気軽に入れる 玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	◎	玄関先には花壇や座る所を設けている。気候の良い時は基本的に玄関の扉を開けて中での歌声や話し声が聞こえるようにしている。	◎	◎	◎	園芸係となっている職員を中心に手入れをし、玄関や事業所周辺には、季節の花が咲いている。玄関前にはベンチが置かれ、地域住民が野菜などを差し入れてくれる時には、そこへ置いてくれるなど、地域の交流の場にもなっている。
26	居心地の良い 共用空間づくり	a	共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、家庭的な雰囲気有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。（天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものしか置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそごような設えになっていないか等。）	○	バランスをとりながら家庭的な雰囲気を無くさないように十分に配慮することに努めている。掲示義務の書類掲示や必要に応じて使う車イス配置、必要性からトイレ内に排泄用品や大きなゴミ箱など置いている為に独特に雑多（混ざった）な感じがあると思います。	◎	◎	○	オープンキッチンから職員が共用空間にいる利用者の様子を見渡せ、吹き抜け空間を活用しながら、利用者の洗濯物を干している様子も見られるなど、とても家庭的で居心地の良い空間となっている。掲示係となっている職員が中心となり、季節感のある飾りを掲示しているほか、掃除も毎日職員が交代で行っている。また、共用空間には、吹き抜けがあるため温度調整などが難しい面もあるものの、広々として開放的な印象である。また、事業所には畑があり、以前は利用者と一緒にナスやトマトなどの夏野菜を栽培していたが、現在は職員が管理している。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	○	カーテンの開閉で光の調整やびつくりするような音を出さないよう配慮している。トイレや床、廊下の掃除は毎日行っている。				
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激（生活感や季節感を感じるもの）を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	◎	季節の花を活けたり、窓を大きくとり外がすぐに見える様にしたし、エアコンの調節をこまめに行い、視覚、聴覚、嗅覚、触覚で季節や時刻を感じるようylにしている。			◎	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	◎	玄関先にベンチを置いたり、リビングにソファを設置している。				
		e	トイレや浴室の内部が共用空間から直接見えないう工夫している。	◎	入退室時には必ず戸を閉めている。				
27	居心地良く過ごせる 居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	入所前には本人様や家族様へ馴染みの物好みの物の持ち込みを呼びかけている。だいたいの方が何らかの物を持ち込んでいる。	◎		○	利用者毎の担当職員が、衣類の衣替えを行ったり、居室への棚の配置を考えるなど、利用者と一緒に考えながら、少しでも心地の良い空間となるよう心がけている。
28	一人ひとりの力が 活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	○	まず、お一人お一人の事を把握して、それぞれの方に対応していく方針である。手すりの設置、床面バリアフリーで移動しやすいように配慮している。			○	事業所では、利用者が自分の居室やトイレなどを迷わないよう、分かりやすい表示などの配慮をしている。いすも、「回転するタイプが良い、動かない方が安全に立ち座りができる」など、利用者によって適切な物が違うため、職員は留意のうえ使い分けをしている。また、杖や歩行者、車いすなど、利用者の状況に合わせて適切に選択できている。
		b	不安や混乱、失敗を招くような環境や物品について検討し、利用者の認識間違いや判断ミスを最小にする工夫をしている。	○	お一人お一人にとってどうであるか検討して、なるべくその人にとってのバリアをなくす環境づくりをしている。				
		c	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。（ぼうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等）	○	新聞や湯飲みは手じかに置いている。家庭において、いつでも手にとれる距離に、ぼうきや掃除機、裁縫道具や大工道具や園芸用品が置いてある方が不自然だと思いませんか。				
29	鍵をかけない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット（棟）の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。（鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等）	◎	夜間以外は、玄関の施錠はしていない。	◎	◎	◎	鍵をかけることの弊害について、職員は十分に理解しており、日中に玄関やユニットの出入り口などは解放されている。また、外へ出ようとする利用者には職員が寄り添い、近くを散歩するなどの支援をしている。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	◎	施錠を望まれる時には、家族様には、心身の状態やホームでの対応について報告している。そして最大限の安全配慮を行っていることとそれでも起こりうるリスクについて話している。				
		c	利用者の自由な暮らしを支え、利用者や家族等に心理的圧迫をもたらさないよう、日中は玄関に鍵をかけなくてもすむよう工夫している（外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等）。	◎	ホームでの暮らしの心地よさを感じて頂くように努めている。目的が散歩や景色を見るためなどの場合は、その都度、付き添いや見守りを行い待たせない配慮を行っている。				

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(4)健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	事前情報や定期検査の報告などで概ね把握している。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	◎	注意しており、記録を行っている。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	ちょっとした皮膚のトラブルや血圧などの異常値の場合は主治医や訪問看護師に報告して指示を仰いでいる。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎	把握して希望に沿って受診支援を行っている。	◎			
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	◎	よく話し合い、希望に応じてかかりつけ医を決めて適切な医療が受けられるようにしている。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	◎	通院前や通院後の報告、今後の支援に付いての話し合いを行っている。				
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	◎	暮らしの近況や認知症の症状など詳しく情報提供を行っている。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。	◎	病院の相談員などと連絡を取り合い早期退院が出来るように努めている。				
		c	利用者の入院時、または入院した場合に備えて日頃から病院関係者との関係づくりを行っている。	◎	身の回りの日用品の補充やタオルなどの洗濯、入院前の暮らしぶりなど、要望や質問があれば連絡してくださいと伝えている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	皮膚の移乗や嘔吐、便のたまり具合、微熱や咳き込みなどなど、ちょっとしたことでも訪問看護師やかかりつけ医へ相談している。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	訪問看護ステーションとの24時間対応の契約となっている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	日常的にバイタル測定を行いサインを見逃さないように取り組んでいる。誤嚥が疑われる場合は頻度を上げて測定し早期発見に努めている。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解している。	○	目的はある程度理解していると思うが副作用や用量がどうであるかについては分からない。注意が必要な時には都度に医師から指示を得ている。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	◎	3度の確認を行っている。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	◎	内服後の経過観察を行っている。				
		d	漫然と服薬支援を行うのではなく、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	◎	血圧が高かったり低かったり、便の状態に關していつもとは違う時はかかりつけ医に相談している。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	◎	現段階での意向を確認しながら暮らしの支援を行っている。				事業所として、「看取りについての対応指針」を作成し、利用者の終末期等で事業所での看取りを希望する場合は医師から説明し、同意書にサインをもらっている。事業所では、日常的に医療関係者との連携が密に取れており、終末期や重度化が進行した場合にも、職員は安心して支援ができています。管理者の印象として、「最近では終末期が近づいた時、利用者本人を含めて家族がしっかりとした判断をし、選択ができる方が増えてきていること」を認識しており、事業所としても、利用者や家族に丁寧に情報提供することを心がけている。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけでなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	◎	随時、本人様、家族様とかかりつけ医や職員との話し合いの機会を作っている。	◎		◎	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	◎	職員のストレスにならないような終末期の支援の検討がなされている。				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	◎	本人様、家族様には都度出来る事や選択肢の提供を行って同意や方針の共有を得ている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	◎	状態に応じて都度検討を行っている。栄養補助飲料やエアマット、ギャッジベッドの使用、吸引機の準備も行っている。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	◎	家族様の心情を理解しながら、気持ち良く本人様と過ごして頂くために配慮を行っている。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	◎	年に2回研修を行い学んでいる。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	△	訓練は行っていないが、取り決めに基づき予防や発症後の対応は行われている。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れている。	◎	取り入れ周知されている。				
		d	地域の感染症発生状況の情報収集に努め、感染症の流行に随時対応している。	◎	情報に関心を持ち随時対応している。				
		e	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	取り決めに基づき支援を行っている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅱ.家族との支え合い									
37	本人とともに支え合う 家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	入所時には、ホームの方針として共に支える事をお伝えしている。支援方法に関しての相談や情報交換を行っている。				現在のコロナ禍の感染症対策として、家族等が利用者と直接面会することができないが、事業所ではオンラインを活用した面会のほか、窓やガラス越しでの面会にも対応するなど、できる限り利用者と家族の思いに応じられるよう工夫している。また、事業所として、最近ではフェイスブックやブログなどのSNSを活用した情報提供にも力を入れており、遠方の家族にも喜ばれている。
		b	家族が気軽に訪れ、居心地よく過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	○	流行病以前はそうであったが現在は地域の情勢に応じた対応を行っている。				
		c	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等)	○	全てではないが、差し入れのおやつと一緒に食したり散歩に出たりする機会を作っている。	○		○	
		d	来訪する機会が少ない家族や疎遠になってしまっている家族も含め、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	月に1回は、家族便りで報告したり、電話【テレビを含む】やブログ、FBを通じて伝えている。	◎		○	
		e	事業所側の一方的な情報提供ではなく、家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して報告を行っている。	○	事あるごとに要望などを伺い実現できるよう努めている。				
		f	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	帰宅願望が強くなることを恐れる家族様に対して粘り強く説明を行い面会を促している。				
		g	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得ようとしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	○	たよりやブログを通じ報告している。	○		○	
		h	家族同士の交流が図られるように、様々な機会を提供している。(家族会、行事、旅行等への働きかけ)	△	COVID19以前はそうであったが現在は地域の情勢に応じた対応を行っている。				
		i	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	入所時や事あるごとに現在のリスクに関してや話し合われた内容について報告している。				
		j	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行っている。	○	礼儀ある応接、またフレンドリーな対応で家族様に対して安心して気軽に話してもらえ環境を作っている。			○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。	○	時間を十分にとり、具体的な例を挙げながら契約内容の説明を行っている。				
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	◎	退去事由については契約書に記載されている。				
		c	契約時及び料金改定時には、料金の内訳を文書で示し、料金の設定理由を具体的に説明し、同意を得ている。(食費、光熱水費、その他の実費、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	◎	得ている。				

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅲ. 地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏域、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	◎	開設時に地域訪問を行っている。運営推進委員は、地域（自治区）の代表者様に代々努めて頂いている。		◎		事業所が開設した当時から比べると、地域住民の高齢化が進んでいるものの、一緒に成長し助け合う関係性が構築されている。日常的に職員は地域住民と顔を合わせており、畑で収穫した野菜を差し入れてくれることも多い。また、法人代表者や管理者家族も事業所に隣接する家屋に住んでいるほか、地元に住んでいる職員もあり、事業所は地域に馴染んでいることを窺うことができた。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。（日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等）	◎	利用者様、職員は屋外で地域の人に出会った時は挨拶が出来ていてフレンドリーである。役員、管理者は地域の自治区の役員や班長を務めている。施設長はじめ事業所役員や職員がその地域に住んでいる。		◎	◎	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	×	過疎地なので減ることはあっても増えることはないと思います。				
		d	地域の人気が気軽に立ち寄ったり遊びに来たりしている。	△	用があれば立ち寄って頂いていますが何もなければ立ち寄ったり遊びに来ることはないでしょう。				
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	◎	出来ている。				
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。（日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援）	×	行なっていない。				
		g	利用者一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	○	地域の中にある自然であったり、人であったり組織であったり、ある資源は活用するように努めている。				
		h	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得ることができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている（公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等）。	○	流行病前は、地域の消防団、消防署、駐在所、小学校との関わりがあったが今は少なくなっている。また、FBやブログを通して利用者様、職員を含め事業所全体の活動を発信している。家族様からは楽しみにしているなどの言葉を頂いている。				
40	運営推進会議を活かした取組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	○	利用者様以外の参加は出来ている。流行病前は一緒にレクリエーションや散歩を行なったりしていた。	○		○	現在のコロナ禍の感染症対策として、集合形式での運営推進会議は実施していない。会議の参加メンバーは、日頃から顔を合わせている家族や地域住民など馴染みの方で構成されており、管理者は、「コロナ禍の状況を見極めながら、できれば以前のように集まりたい」と考え、調整している。会議では、事業所からの現況報告のほか、認知症のことなどを取り上げて一緒に考えたり、福祉行政についての情報提供をしたりするなど、工夫しながら開催されている。また、参加者から発言も多く出され、活発な意見交換ができています。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況（自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等）について報告している。	○	報告はしているが、そもそも認知度や実用性の低い事業なので運営推進会議の議題としては大きく扱っていない。			○	
		c	運営推進会議では、事業所からの一方的な報告に終わらず、会議で出された意見や提案等を日々の取り組みやサービス向上に活かし、その状況や結果等について報告している。	○	課題や取り組みの進捗状況については結果が出るまで報告を行なっている。		◎	○	
		d	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	△	特殊なテーマの場合は必要だとは思いますが、それ以外ではメンバーを変える必要が無いと思います。		◎		
		e	運営推進会議の議事録を公表している。	◎	ホーム内で閲覧できるようにしている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅳ.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	◎	共通の認識をもち理念を理解し、同じ方向を向いている。				
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	◎	家族様には入所前に伝えている。それよりもその理念の体現によって伝わっていると思う。	○	◎		
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	○	基本的に法人外での研修は必要はないと考えている。何故なら今はインターネットがあるからです。法人内で計画的に研修を行なっている。				事業所では、毎月テーマを決めて研修会を実施し、職員のスキルアップに努めている。研修会の担当は職員の交代制となっており、職員自身が研修内容を検討して開催することで、一人ひとりが主体的に取り組むことができている。また、研修会では講義を職員が一方的に聴講するに留まることなく、グループワークを中心とした実践的な内容も多い。さらに、事業所では、日頃の支援の現場でとっさの時に職員がしっかりと考え、判断ができる力を身につけることができるよう取り組んでいる。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	知識、技術、考え方や態度を基本に日々の実務の中での教育や訓練にあたっている。				
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	世の中の流れを見て、新しい取り組みにチャレンジするようにしている。				
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	○	県の事業所団体に所属、町中での任意団体に所属して情報交換などを行なっている。				
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	日勤帯の3人＋α体制を維持することに努めている。	○	◎	○	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解している。	◎	委員会を設置していてその中で法律を学んだり事例検討をしたりしている。				虐待防止等をテーマに何度も研修会を実施し、職員の理解も深まっている。最近では、スピーチロックに力を入れ指導している。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	◎	朝と夕申し送りを一緒に聴いて状況に基づく助言や職員のとった判断について話し合ったりしている。				
		c	代表者及び全ての職員は、虐待や不適切なケアが見逃されることがないように注意を払い、これらの行為を発見した場合の対応方法や手順について知っている。	◎	全体で学ぶ機会を持っている。			◎	
		d	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	◎	合理的判断に基づく無理のないケアを行うよう指示をしている。				
44	身体拘束をしない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	◎	全体で学ぶ機会を持っている。やむを得ない場面自体が起きない取り組みを行なっている。				
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	◎	全体で事例検討会を行なっている。				
		c	家族等から拘束や施設員の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	◎	ある場合は説明している。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する 制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解している。	△	長年管理者をしています、そもそもの権限が希薄であると考えます。それはセンシティブな問題で出来れば家族間や行政や司法機関で解決してほしいと考えている。				
		b	利用者や家族の現状を踏まえて、それぞれの制度の違いや利点なども含め、パンフレット等で情報提供したり、相談にのる等の支援を行っている。	△	私たちは民間事業者なので、それを率先して行なうのは私たちではなく行政機関、NPO等の権利擁護団体であると思っています。				
		c	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	×	築いていない。				
46	急変や事故発生時の 備え・事故防止の 取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	○	マニュアルは掲示している。毎年勉強会を行なっている。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	△	訓練は行なっていない。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	事故報告書、ヒヤリハットを作成している。それをもとに全体で検討会を行なっている。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	検討会の中で把握し防止につなげている。				
47	苦情への迅速な対応と 改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	○	殆どの職員は理解している。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	そのような事案が出来ないよう取り組んでいる。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	もしも事案が発生したら手続きにのっとり、透明性を持った事実確認を行い今後の対策、改善を行いたいと思います。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、個別に訊く機会等)	○	契約内容に対する要望や苦情に関しては真摯に耳を傾けないといけないと思います。			○	職員は、気軽に利用者や家族から相談してもらえるよう配慮している。現在のコロナ禍においての感染症対策もあり、面会制限や外出支援など、家族の要望に応えられない場面もあるが、職員は「できる限り対応したい」と考えている。日頃から、管理者は「職員に主体的に考えて取り組むよう、自分たちが運営者だ」という思いを持つよう指導している。訪問調査日の職員への聞き取りからも、職員全員がしっかりと話し合って意見を出し合い、考えを発信するよう意欲的に取り組んでいる様子を窺うことができた。
		b	家族等が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	意見を聞きながら運営体制の見直しは必要だと思います。	◎		○	
		c	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	○	契約時に重要事項説明書の読み上げを行なっていて、その中で情報提供を行なっている。				
		d	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	◎	代表者は現場に居ます。				
		e	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	◎	運営会議の開催。個々の考え方や意見、立案に対するレスポンスを必ず行うように努めている。			◎	

愛媛県グループホームあまご

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	◎	意義があるのかどうかは別として自己評価を行なっています。				定期的に外部評価を受審していることもあり、評価内容等は運営推進会議の参加者や家族、地域住民にも認知されている。今後、状況に応じてモニター機能も依頼していく予定である。
		b	評価を通して事業所の現状や課題を明らかにするとともに、意識統一や学習の機会として活かしている。	×	この内容では課題を自ら考えた方が利用者様の為になると思うので活かしていない。				
		c	評価（自己・外部・家族・地域）の結果を踏まえて実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	×	自事業所の課題は自事業所が見つけた決定を行い計画立案し事業所全体で取り組んでいる。				
		d	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	×	自事業所で立案した計画については取り組みを知ってもらう上でモニタリングを依頼できたら良いと思います。	○	◎	○	
		e	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	×	自分たちで立案した計画に対してはその成果の確認が必要だと思い取り組みの成果を報告している。				
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。（火災、地震、津波、風水害、原子力災害等）	○	マニュアルの作成、毎年県に報告している。				事業所では、地域の消防団との連携もあり、災害時の訓練についても十分に実施されている。以前は地域との協力体制ができていたが、現在は地域住民の高齢化も進み、想定していたような事業所への災害発生時の支援協力は期待できない状況となっている。また、全国的に風水害が増加し、地域の状況も年々変化していることもあり、事業所としても流動的な災害への備えを強化している。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	主に夜間帯の避難訓練を行なっている。				
		d	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	○	行なっている。				
		e	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	○	消防署の支援をもとに訓練を実施している。	○	○	○	
		f	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。（県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等）	○	共同訓練は行なっていない。ただし、町や地域には災害対策の状況や緊急時に協力出来ることは伝えている。				
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。（広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等）	△	広報活動は行なっている。				以前は、事業所として地域のいきいきサロンを実施し、地域の高齢者などの相談支援もできていたが、現在のコロナ禍において、開催を中止している。利用者との散歩途中に声かけをするなど、サロンの利用者との交流は継続している。また、事業所では、地域住民が集まれる場づくりとして、現在新たな取組を検討している。さらに、事業所として、地域に貢献したい気持ちは強く、「恩返しをしたい」という思いを持っている。今後、さらなる地域の活動拠点などの広がりを期待したい。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	○	流行病以前は、地域のいきいきサロンを開催して相談支援を行なっていた。		○	◎	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。（サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等）	△	事業所ではあるが、そこに住んでいる人が居て、その人たちがそれを必要だとしているということを前提とした活動は必要だと思っています。				
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	△	ジョブチャレンジに協力しているが最近は介護施設への希望が少ないので受け入れていない。				
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。（地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等）	○	その利用者様にとって必要な機関等々に対しては連携、協働を行なっている。			○	

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

II.家族との支え合い

III.地域との支え合い

IV.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
ジャンプ 評価の公表で取り組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 3 年 7 月 1 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 16名	(依頼数) 18名
地域アンケート回答数	6名	

※事業所記入

事業所番号	3873600450
事業所名	グループホームあまご
(ユニット名)	ふなっこ
記入者(管理者)	
氏 名	藤澤邦哉
自己評価作成日	令和 3 年 3 月 23 日

【事業所理念】 1. 何事も決して急がず、利用者のペースに合わせて行動します。 2. 常時、会話に心掛け、利用者が安心して生活できる環境作りに努めます。 3. 地域の人とのふれあいを大切にします。	【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】	【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】 自然豊かで、とても静かな環境にある事業所は、畑で採れた野菜を差し入れてくれる地域住民や、主体的に考え行動ができるチームワークの良い職員に見守られながら、利用者が穏やかに生活を送ることができている。事業所では、「利用者がどうしたいのか、気持ちよく過ごすためにはどうしたらよいのか」を最優先に考え、そのために職員一人ひとりがしっかりとスキルアップにつながるよう、努力を惜しまない様子がとても印象的であった。また、事業所では、職員間で検討を重ねて、タブレットでの記録などの「オンラインシステム」を導入し、様々な機能を活用しながら、職員間の確実な情報共有にも役立っている。さらに、現在のコロナ禍において、外出や面会制限を設けているものの、オンラインでの面会を取り入れたり、フェイスブックなどのSNSを活用して、利用者の様子などの情報発信したりするなど、遠方の家族などからも喜ばれている。
---	--------------------------	---

評価結果表

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅰ.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	職員の思い込みにならないよう利用者様との会話や行動、態度を通して把握に努めている。	◎		○	日頃の暮らしの中で、全ての職員は利用者の思いや意向の把握に努めている。管理者は、「利用者が思いを上手く表出できないのではなく、職員が上手く引き出せていないだけ」という認識で、職員のコミュニケーション能力について注視している。また、職員間の能力差はあるものの、聞き取りやコミュニケーション能力に長ける職員が中心となって、利用者の思いを引き出せるよう取り組んでいる。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	身体や精神状態の確認をもとに、どのようにしたら気持ち良く暮らせるのだろうか検討、ケアの実施、改善を行っている。				
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	面会や電話、手紙などで家族様などとコンタクトしている。				
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	○	ヒントになるような発言や態度、行動を記録して共有している。				
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	決めたサービスが利用者様にとって良いのかどうかは実施してみないと分からない場合もあるのでその時は、柔軟に対応している。その時その時の思いの変化にも注意を払っている。				
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	○	事前調査や入所後の本人様や家族様との関わりで情報収集している。			○	事業所の開設当初からと比較すると、最近では入院先や別の施設から移ってくる利用者が増え、自宅から入居する利用者は少数になっている。職員は、利用者や家族から聞き取りをする生活歴やこだわりなどの情報のみに留まらず、入居前の病院や施設などの支援者からも、積極的に情報収集をしている。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	○	定期的なアセスメントと日頃のケアの中で把握に努めている。				
		c	本人がどのような場所や場面で安心したり、不安になったり、不安定になったりするかを把握している。	○	排泄、飲食、睡眠状況、人との関わりなど生活のあらゆる場面で把握に努めている。				
		d	不安や不安定になっている要因が何かについて、把握に努めている。(身体面・精神面・生活環境・職員のかかわり等)	○	記録した情報をもとに分析、改善への取り組みを行っている。				
		e	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握している。	○	24時間時系列での記録をとり把握している。				
3	チームで行うアセスメント (※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	担当者会議だけではなく、事象を常時、本人様視点で捉えチームとしてサービスを提供する習慣化を行っている。			○	最近導入された「オンラインシステム」を活用して、職員一人ひとりが丁寧に書き留めた利用者の日常の様子が記録され、会議などで情報共有のうえより良いサービスを検討している。また、「オンラインシステム」の中には、情報共有のための便利な機能がいくつもあり、サービスの実施状況を記録すると、介護計画の内容にも連動するなど、同システムの導入により確実な情報共有に役立っている。
		b	本人がより良く暮らすために必要な支援とは何かを検討している。	○	計画作成担当者、ホーム長、担当者、医療機関関係者を中心に担当者会議で検討を行っている。必要に応じて家族様への相談や情報提供依頼を行っている。				
		c	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題を明らかにしている。	○	計画作成担当者、ホーム長、担当者、医療関係者を中心にチームとしての課題、目的共有、明確化を行っている。				

愛媛県グループホームあまご

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
4	チームでつくる本人が より良く暮らすための 介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	計画書第2表の作成は、まずは、本人様の思いや意向が記載されておりそれをもとに実施内容が作成されている。				利用者毎の担当職員や医療関係者、ホーム長、管理者等でカンファレンスを実施し、日常的な職員の記録から利用者の思い等をくみ取り、介護計画につなげている。また、計画作成担当者がまとめて介護計画を立案を作成し、家族等に説明している。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	サービス実施についての自己評価及び担当者が行う計画書への評価、担当者会議での計画作成担当者やホーム長、担当者、医療関係者でそれぞれ意見を交換を行っている。家族様にも話し合った内容を伝えている。	○		○	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	重度の線引きや定義をするのではなく今の状態をありのまま受け入れ状態の維持や改善についてチームで話し合い計画書に反映している。				
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	△	一部の利用者様には計画書内に記載はされているが、記載しなくても家族様や、地域の資源は本人様支援の為には必要だと考えている。				
5	介護計画に基づいた 日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	○	ケース記録に添付しており常に把握や確認が出来る状態である。			○	事業所では、職員間で十分な検討を重ね、最近「オンラインシステム」を導入している。職員間においても、システム活用のスキルの差はあるものの、一人ひとりが熱心に入力作業に取り組み、利用者との会話など日常の具体的な様子も記載することができている。また、介護計画の目標に沿って、日々の支援内容を入力し、記録に残すことができている。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	計画に番号を打ち、ケース記録を記入するときにその番号を記入することで実践状況が把握できる仕組みにしている。また、定期的に、職員が自己評価を行い自分の実践状況を振り返る機会を得ている。			○	
		c	利用者一人ひとりの日々の暮らしの様子(言葉・表情・しぐさ・行動・身体状況・エピソード等)や支援した具体的内容を個別に記録している。	○	全てを記録するのは非合理的でありケアに混乱をもたらすと思います。計画書に基づいたことに対しては、場面場面での様子を個別に記録している。その時の利用者様、介護者の発言内容を記録している。			○	
		d	利用者一人ひとりについて、職員の気づきや工夫、アイデア等を個別に記録している。	△	お一人様お一人様に対する気づきやアイデアは、ホーム長や計画作成担当者に相談できるようにしている。			○	
6	現状に即した 介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	◎	定期的に行っている。			◎	利用者の状態等に変更が見られた場合には、すぐに介護計画の見直しをしている。事業所では、「利用者の状況が変わらない、目標が達成できないのであれば、計画の内容が不適切なのではないか」との考えがあり、内容を見直すよう配慮している。また、日々の暮らしの中で、利用者の介護計画の内容と違う状況になった場合にも、職員間でしっかりと話し合い、利用者にとっての最善のサービスを考え、臨機応変に対応している。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	×	日々が現状確認であると思います。そのことから、迅速に対応の変化を現状に合わせるのは当然でありわざわざ期間を設ける必要はないと考えます。			○	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	◎	明らかに介護計画書が機能しない場合は、緊急に会議を行い新たな計画書を速やかに作成している。			◎	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	◎	開催している。			◎	担当者会議やケースカンファレンス等は、利用者毎の担当職員と管理者、ホーム長に加え、法人代表者でもある医師または訪問看護師の参加を得て開催している。職員は、医療関係者に気軽に相談や確認をすることができ、大きな安心につながっている。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	○	それぞれの職員が自分がケアを行ってどうであったかを情報を提供している。エビデンスに基づく意見交換を行っている。全体での会議では一人一人が発言の機会を持っている。				
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫している。	×	議題によって参加者を限定している。勿論、全員参加の会議もある。また、リモートでの参加も行っている。全員で会議をするのが目的ではないことに留意しつつ、ホーム長や計画作成担当者が職員個々の意見を吸い上げる仕組みにしている。				
		d	参加できない職員がいた場合には、話し合われた内容を正確に伝えるしくみをつくっている。	◎	話し合われた内容は、ノートやデジタルにて申し送りを行い共有している。			◎	
8	確実な申し送り、情報伝達	a	職員間で情報伝達すべき内容と方法について具体的に検討し、共有できるしくみをつくっている。	◎	情報伝達の手段を複数持ち内容によって選んでいる。			◎	事業所では、「オンラインシステム」を導入したことにより、強調したい項目を赤色で表示にしたり、画面を切り替えても表示を継続できる設定にしたりするなど、便利な機能を活用している。また、内容によっては、ノートに手書きするタイプの申し送りも残しており、その場合は、職員の確認後に署名することで閲覧済みの確認をしている。
		b	日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	○	重要な事柄に関しては口頭ではなく何らかの記録で行い確実に伝わるようにしている。	◎			

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切にしたい支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	△	その日その日ではなくその時その時の意思決定(把握)を積み重ねていく努力をしている。				事業所では、「伝えることが難しいだけで、どのような状態の利用者も自己決定ができないわけではない」という考えのもと、選択できる機会を設けるなど、職員は利用者の意向に沿った支援を心がけている。管理者は、「職員からの尋ね方や声をかけるタイミング、表情や様子から思いをくみ取る能力のスキルアップが必要である」と感じている。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	◎	提案はするが決めるのは本人様自身であるという立場で日々関わっている。			◎	
		c	利用者が思いや希望を表せるように働きかけたり、わかる力に合わせた支援を行うなど、本人が自分で決めたり、納得しながら暮らせるよう支援している。	○	利用者様一人一人がそれぞれ自尊心を大切にしながら暮らせるように職員はコミュニケーション技術の向上、ホームとして出来る事の間口を広げるように努めている。				
		d	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切にしたい支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	△	利用者様の視点に立った緩やかなルールの中で支援を行っている。ルールから外れたとしてもそれを受け入れられる寛容な雰囲気づくりに努めている。職員側の都合や決まり優先という言葉は非常に失礼な言い方だと思いますので止めてください。				
		e	利用者の活き活きた言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	喜び楽しみだけでなく色々な感情表出が引き出せるようにコミュニケーション技術(傾聴・共感・リアクション等)向上に努めている。			○	
		f	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	○	その困難は、利用者様だけに原因があるのではなくケア側の態度や技術等に課題があるという認識の下で意向の表現や意思決定支援を行っている。				
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切にしたい言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。	◎	それについての意識の浸透と向上のために、会議を行い自己点検やお互いに言葉遣いの事について意見を言い合える職場作りにも努めている。	◎	◎	◎	事業所では、日常的に当然のこととして、職員が利用者のプライバシーに配慮した支援を行っている。また、排泄介助時に、職員が利用者に寄り添う場合には、タオルを使用して目隠しにするなどの工夫もしている。
		b	職員は、利用者一人ひとりに対して敬意を払い、人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮しており、目立たずさりげない言葉がけや対応を行っている。	○	場合によっては他者様たちの前で大きな声で声をかけないといけない場面もあるが、会議で自己点検実施したり嫌な思いをさせない声の掛け方や介助の工夫についての検討会や許容範囲の線引きを行っている。			○	
		c	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	○	一つ一つ声をかけ同意を得ながら排泄介助を行ったり排便の確認などはさりげなく声をかけ行っている。個浴による入浴介助を実施している。				
		d	職員は、居室は利用者専有の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	○	利用者の状態に関係なくノックまたは、声をかけて入室している。また、居室に居ない場合にであっても本人様の同意を得て入室をさせてもらっている。			○	
		e	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	◎	職員は守秘義務の誓約書に署名しており遵守している。また、職員同士でやりとりするプライバシーに関わる内容は本人様や他者に聞こえないよう配慮を行っている。				
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けってもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	◎	互いを尊重し合うことで、お互いに感謝の言葉が出る関係づくり、また、意思決定や同意を大切にする事でお互いの立場が対等であることを伝えている。				職員は、利用者の性格や相性などを十分に把握しており、その上で一人ひとりが穏やかに過ごせるよう配慮している。また、事業所では、多少のいさかいが起こるのも自然なことで捉え、職員は利用者同士のトラブルが長引かないよう支援している。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	○	理解しているが、協調性や全体性を重視しすぎるのは、個別の暮らしの充実とは相反するので折り合いが難しい。				
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等)。	○	利用者様の個性や他者様との相性など把握できている。また、コミュニケーションや身体精神状況が異なることを踏まえ無理のない緩やかな共存関係の構築が出来ている。あくまでも個々への尊重であり個々の権利優先であるからして誰かを世話役的に考える事は非常に危険な考え方だと思えるようなことは実施していません。			○	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	◎	予測に基づき未然に防げることは防ぐ。トラブル時は、職員が裁くのではなく、必ず当事者様の話をまず聞きその思いや相手に伝えたい気持ちに共感を行っている。				

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
12	馴染みの人や場との関係 継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係について把握している。	△	事前聞き取りである程度把握できている。自らのコミュニケーションを通じて更なる引き出しに努める職員と情報を与えられるのを待つ職員がいる。				
		b	利用者一人ひとりがこれまで培ってきた地域との関係や馴染みの場所などについて把握している。	△	事前聞き取りで地域とどう関わってきたかやよく行っていたお店や病院などについては把握できている。それ以上に関しては職員ごとに差がある。				
		c	知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていくなど本人がこれまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	△	現在は、外出してその場所を訪れたり、人との親交を維持するような支援が出来ていない。				
		d	家族、知人、友人等、本人の馴染みの人たちが、いつでも気軽に訪れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	△	以前はそうであったが現在は、訪問の制限があるのでそのようになっていない。				
13	日常的な外出支援	a	利用者が、1日中ホームの中で過ごすことがないよう、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない) (※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	○	寝たきりの方を除いてすべての利用者様の施設周りの散歩支援を行っている。その方の希望に合わせて歩く距離や赴く場所を選んでいる。 (※職員の都合という文言を軽率に使うのは止めましょう。)	○	○	○	現在のコロナ禍の感染症対策として、買い物に出かけるなどの外出できる機会は減っているものの、日常的に、利用者が事業所周辺を散歩できるよう支援している。事業所では、利用者の意向を最優先させるため、全ての利用者が揃って外出することはあまり想定していないが、利用者の状態に関わらず、気持ちに寄り添い、利用者のペースで出かけられるよう支援している。
		b	地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	×	現在の状況では行えていない。そもそもそのような地域資源がない。				
		c	重度の利用者も戸外で気持ち良く過ごせるよう取り組んでいる。	×	施設周りの散歩の支援は行っている。			○	
		d	本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら、普段は行けないような場所でも出かけられるように支援している。	×	していない。				
14	心身機能の維持、 向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	理解の幅はあるが、あらゆる因子を検討し環境を整え引き起こさないよう取り組んでいる。				利用者毎に、できることやできないことについて十分にアセスメントをしており、職員は利用者自身ができることや選ぶことを待つ支援ができてい る。また、「できる、できない」にかかわらず、利用者自身がやってみたいこと や参加したいことに対して、職員は積極的に支援をしている。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	○	運動や遊び、身の回りの事などその方に合った取り組みを通じて予防を行っている。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	○	個々の状態を見極め、押しつけや過介護にならないよう取り組んでいる。	◎		○	
15	役割、楽しみごと、 気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	○	利用者様個々のそういった情報は把握した上で、今、どのようなことで楽しい気持ちになれるのか、嬉しい気持ちになれるのか検討している。				職員は、利用者一人ひとりが思い通りのペースで楽しく過ごせるよう支援している。事業所では、「利用者に出番や役割を作る」という形で支援することなく、利用者が自ら希望して行った事柄について、その都度職員が感謝の気持ちを伝えることで、利用者のやりがいや生きる源として、喜びを感じてもらえるような配慮をしている。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	○	全ての方が役割や出番があるわけではなく、またそれを欲しているわけではないということを踏まえて、何かが出来るからという判断ではなく自らしたいという自己判断を尊重しながら楽しみごとや役割の支援を行っている。	○	◎	○	
		c	地域の中で役割や出番、楽しみ、張り合いが持てるよう支援している。	×	支援していない。				

愛媛県グループホームあまご

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみや おしやれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つととらえ、その人らしい身だしなみやおしやれについて把握している。	△	全ての方の把握はしていない。				利用者によっては、気に入っている服装や着心地の良い物を繰り返し着たい時もあるため、職員は清潔感を保ちながらも、利用者の思いに沿った支援をしている。また、職員は利用者の状態に関わらず、積極的に着替えを促す声かけをするようにしている。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みで整えられるように支援している。	△	把握できている方に関しては支援できている。また、家族様を選んできてきていただいた服や持ち物を使用できるよう支援している。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員と一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	判断力の度合いに応じて、一緒に選んでいる。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせたその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	◎	タンスの中の入替えを季節毎に行い、季節に合った服装が出来る支援を行っている。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にできさりげなくカバーしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	あからさまなことをせずに清潔感を保った身だしなみが出来る支援を行っている。	○	◎	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	◎	希望がある場合は送迎や支払いなどの支援を行っている。ホーム内での理容においても相談しながら行っている。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	気持ち良さや楽しさ、清潔感を見ながら支援を行っている。			○	
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	○	生きる上での楽しみであり、心身の健康を保つために必要であると理解している。				利用者の好みや意見も取り入れながら、管理者が献立を考え、ユニット毎に職員が交代で調理をしている。調理が不慣れな職員には、他の職員等が具体的に味付けの調整のアドバイスをするなど、適切な支援を行っている。地域住民から野菜の差し入れをいただくことも多く、旬の食材を使用しながら季節を感じられる食卓になっている。また、職員も同じ食卓で、利用者と一緒に食事を摂っており、会話を楽しんだり、食の好みを把握したりできる機会にもなっている。さらに、献立については、偏りがないように配慮し、職員等からの意見をもらうことができている。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	△	台拭きや下膳は一緒に行っている。その他の事に関しては行っていない。今は、その活動を望む利用者様は少ない。個々の主張に配慮しつつも主張しない方の事も配慮している。			○	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	△	丁寧をお願いしたり、感謝の意を伝えてはいる。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	把握はしている。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって昔なつかしいもの等を取り入れている。	○	畑で採れた野菜や近所の農家の方に頂いた野菜をふんだんに使ったり、芋ご飯やだんご汁、季節の山菜など昔食べていたであろう食事を取り入れている。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせた調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いりどりや器の工夫等)	○	誤嚥性肺炎の可能性と相談しながらの食事形態を検討している。見かけだけではなく、基本のhot is hot, cold is cold を実践している。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	それぞれ模様や材質など違ったものを使用して頂いている。			○	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	◎	一緒に同じものを食べている。要介助者の介助をしつつも周りに配慮しながら声かけを行っている。			◎	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	○	働きかけの声かけや、何が出来ているのだろうかと一緒に考えたり、一緒に食前体操を行い食事の時間が近づいていることを意識して頂く配慮を行っている。また、オープンキッチンなので匂いは直ぐにリビングに漏れると思います。	◎		○	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べれる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	○	病状や体型などに配慮しながら水分や食事の摂取量を調整している。				
		k	食事が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	好きな飲み物にしたり、時間をずらして食べなくなるのを待ったり、一度に飲むのが負担な場合は、回数を増やしたりしている。飲んだり食べたりすることが本人様の精神的負担にならないよう配慮した支援を行っている。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	○	献立作りは、管理者が行い出来た献立に関して各職員からのコメントを受け修正するようにしている。栄養士のアドバイスは受けていないが、炭水化物ばかりにならないよう配慮している。			○	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	○	毎日、まな板や布巾などの消毒を行っている。冷蔵庫の掃除や納品時に在庫食品の確認を行い清潔や鮮度を管理している。				

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	◎	勉強会で学び必要性や重要性について理解できている。				職員は、利用者の口腔内の状況を把握し、必要に応じて訪問歯科診療や外来受診につなげている。口腔内の状況についてはアセスメントシートにも記載されており、受診や口腔ケアの介助の有無などを記録している。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	○	付き添い、必要な介助を行い把握している。			○	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	△	トラブル時は、外来または訪問歯科受診を受け指導して頂いている。				
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	○	義歯を使用している利用者様に対しては毎日磨けているかどうか確認している。				
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないよう、口腔の清潔を日常的に支援している。 (歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック等)	○	トラブルが起きやすい方に対しては特に行っている。			○	
		f	虫歯、歯ぐきの腫れ、義歯の不具合等の状態をそのままにせず、歯科医に受診するなどの対応を行っている。	◎	トラブルを見つけたら外来または訪問歯科受診を行っている。				
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	○	理解している。				入居後に、職員が声かけやトイレの利用を促すことなどにより、オムツから紙パンツに変更したり、パッドが小さい物で済むようになったりするなど、改善が見られた利用者もいる。最近の排泄用品は性能の良い物も多く、利用者の状況に応じて、相談しながら紙パンツやパッドなどを変更することで、利用者の履き心地が良くなったり、薄くても吸収量が多い性能が良いパッドを使用したりするなど、利用者に合った支援をしている。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	理解している。				
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	○	概ね把握している。記録を行い共有している。				
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	○	その時の状態を把握してトイレでの排泄支援に取り組んでいる。最近では、入所時から紙パンツを履いている方が多い。	◎		○	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	排泄そのものや排泄に至る行為、食事や水分などに注目して改善の取り組みを行っている。				
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	記録をもとに把握に努め誘導を行っている。				
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	△	自立されている方は自分で選んで選んで載っているがそうでない場合は職員が十分吟味して選んでいる。適切かどうかの確認は頻繁に行っている。気になる家族様に対しては報告するようにしている。				
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けている。	○	個々の状態に応じて使うものを検討し導入している。				
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	△	運動を取り入れたり、食物繊維の摂取、夏場の水分摂取量を増やすよう試みたりする程度である。				
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)。	×	曜日や時間帯などは、施設側が指定している。指定することは合理的判断ではないでしょうか。一人一人の好みを把握して入浴支援を行っている。	◎		○	職員配置の関係もあり、事業所で事前に入浴計画を立て、利用者が順番に入浴できるよう支援している。入浴拒否のある利用者や対応する職員の交代などには個別に対応しており、できる限り利用者の意向に沿った入浴ができるよう心がけている。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分に入浴できるよう支援している。	△	時間に追われて支援している中で最大限の配慮を行っている。				
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	○	勿論そうではあるが、浴室は、事故や健康状態急変の確率が高い場所であることを考慮しながら一人一人に支援を行っている。				
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせずに気持ち良く入浴できるよう工夫している。	◎	原因や理由が毎回同じとは限らないので都度本人様の気持ちや意向を伺い清潔維持との天秤をかけながらどうしてもという時は粘り強く対応している。				
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	◎	入浴前にバイタル測定を必ず行っている。浴後の経過の見守り、水分補給を勧めている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	◎	把握できている。				日中の過ごし方などを試行錯誤しながら、介護面でできる限り、利用者が夜間に安眠できるよう工夫している。夜間の安眠が難しい利用者には体調面を考え、主治医と相談して内服薬を処方してもらったり、必要に応じて、精神科へつないだりすることもある。また、事業所では、利用者自身がつらい思いをしないことを最優先に考えて、対応している。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	食生活や排泄、日中の活動量など把握を行い原因を探っている。その都度、生活リズムを整える試みを行っている。				
		c	睡眠導入剤や安定剤等の薬剤に安易に頼るのではなく、利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	◎	そこに至るまでのプロセスを守った上で、つまり原因や状態、健康状態の悪化リスク等を把握して改善の取り組みを行った上で効果の無い場合は医師と相談して眠前薬や安定剤の処方を受けている。			◎	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	個々の状態に応じて休息を支援している。				
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	◎	希望が無くても本人様に家族様とのコミュニケーションを望む兆候があればこちらから勧めている。家族様にも協力の呼びかけを行っている。				
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	○	掛けることや書く能力のことは手段であり大切なことではないと理解している。各利用者様に対して必要に応じて家族様とのコミュニケーション支援を実施している。				
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	○	本人様の要望や状態に合わせて電話をかける場所や取次等の配慮を行っている。家族様にも協力して頂いている。				
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	○	本人様の状態に合わせて、手紙の内容を伝えたり写真付きの場合は飾ったり、お礼の電話を勧めたりして支援している。				
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力をしてもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	◎	出来ている。				
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	理解できている。				
		b	必要物品や好みの買い物に出かけ、お金の所持や使う機会を日常的につくっている。	○	各利用者様によってお金に対する価値観の違いを把握して使う場面への支援を行っている。				
		c	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	○	近くに店が無いので定期的に巡回する移動販売を利用して頂いている。				
		d	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	×	決めつける以前の話として、お金の怖さを理解している施設の対応としては、入所時にトラブルの事例を伝えて個人でのお金の所持はお断りしている。				
		e	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	所持については認めていないので相談していないが、どうしても所持したい場合は施設側が責任は負わないとお伝えしている。使い方に關しては頻繁に相談している。				
		f	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしておき、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	◎	得ている。				
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々々のニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	他科外来の付き添いや急な受診時の付き添い、入退院、入院中における支援、療養マッサージの受け入れなど本人様の諸事情に合わせて出来るだけ対応している。	◎		○	家族から外来受診の付き添いの希望が多く、職員が対応することで大変喜ばれている。今後も、事業所として、可能な範囲で利用者や家族の希望や要望に、柔軟に対応していく予定である。

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(3)生活環境づくり									
25	気軽に入れる 玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	◎	玄関先には花壇や座る所を設けている。気候の良い時は基本的に玄関の扉を開けて中での歌声や話し声が聞こえるようにしている。	◎	◎	◎	園芸係となっている職員を中心に手入れをし、玄関や事業所周辺には、季節の花が咲いている。玄関前にはベンチが置かれ、地域住民が野菜などを差し入れてくれる時には、そこへ置いてくれるなど、地域の交流の場にもなっている。
26	居心地の良い 共用空間づくり	a	共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、家庭的な雰囲気有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。（天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものしか置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそごような設えになっていないか等。）	○	バランスをとりながら家庭的な雰囲気を無くさないように十分に配慮することに努めている。掲示義務の書類掲示や必要に応じて使う車イス配置、必要性からトイレ内に排泄用品や大きなゴミ箱など置いている為に独特に雑多（混ざった）な感じがあると思います。	◎	◎	○	オープンキッチンから職員が共用空間にいる利用者の様子を見渡せ、吹き抜け空間を活用しながら、利用者の洗濯物を干している様子も見られるなど、とても家庭的で居心地の良い空間となっている。掲示係となっている職員が中心となり、季節感のある飾りを掲示しているほか、掃除も毎日職員が交代で行っている。また、共用空間には、吹き抜けがあるため温度調整などが難しい面もあるものの、広々として開放的な印象である。また、事業所には畑があり、以前は利用者と一緒にナスやトマトなどの夏野菜を栽培していたが、現在は職員が管理している。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	○	カーテンの開閉で光の調整やびつくりするような音を出さないよう配慮している。トイレや床、廊下の掃除は毎日行っている。	/	/	/	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激（生活感や季節感を感じるもの）を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	◎	季節の花を活けたり、窓を大きくとり外がすぐに見える様にしたし、エアコンの調節をこまめに行い、視覚、聴覚、嗅覚、触覚で季節や時刻を感じるようylにしている。	/	/	◎	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	◎	玄関先にベンチを置いたり、リビングにソファを設置している。	/	/	/	
		e	トイレや浴室の内部が共用空間から直接見えないう工夫している。	◎	入退室時には必ず戸を閉めている。	/	/	/	
27	居心地良く過ごせる 居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	入所前には本人様や家族様へ馴染みの物好みの物の持ち込みを呼びかけている。だいたいの方が何らかの物を持ち込んでいる。	◎	/	○	利用者毎の担当職員が、衣類の衣替えを行ったり、居室への棚の配置を考えるなど、利用者と一緒に考えながら、少しでも心地の良い空間となるよう心がけている。
28	一人ひとりの力が 活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	○	まず、お一人お一人の事を把握して、それぞれの方に対応していく方針である。手すりの設置、床面バリアフリーで移動しやすいように配慮している。	/	/	○	事業所では、利用者が自分の居室やトイレなどを迷わないよう、分かりやすい表示などの配慮をしている。いすも、「回転するタイプが良い、動かない方が安全に立ち座りができる」など、利用者によって適切な物が違うため、職員は留意のうえ使い分けをしている。また、杖や歩行者、車いすなど、利用者の状況に合わせて適切に選択できている。
		b	不安や混乱、失敗を招くような環境や物品について検討し、利用者の認識間違いや判断ミスを最小にする工夫をしている。	○	お一人お一人にとってどうであるか検討して、なるべくその人にとってのバリアをなくす環境づくりをしている。	/	/	/	
		c	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。（ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等）	○	新聞や湯飲みは手じかに置いている。家庭において、いつでも手にとれる距離に、ほうきや掃除機、裁縫道具や大工道具や園芸用品が置いてある方が不自然だと思いませんか。	/	/	/	
29	鍵をかけない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット（棟）の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。（鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等）	◎	夜間以外は、玄関の施錠はしていない。	◎	◎	◎	鍵をかけることの弊害について、職員は十分に理解しており、日中に玄関やユニットの出入り口などは解放されている。また、外へ出ようとする利用者には職員が寄り添い、近くを散歩するなどの支援をしている。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	◎	施錠を望まれる時には、家族様には、心身の状態やホームでの対応について報告している。そして最大限の安全配慮を行っていることとそれでも起こりうるリスクについて話している。	/	/	/	
		c	利用者の自由な暮らしを支え、利用者や家族等に心理的圧迫をもたらさないよう、日中は玄関に鍵をかけなくてもすむよう工夫している（外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等）。	◎	ホームでの暮らしの心地よさを感じて頂くように努めている。目的が散歩や景色を見るためなどの場合は、その都度、付き添いや見守りを行い待たせない配慮を行っている。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小 項目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(4)健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	事前情報や定期検査の報告などで概ね把握している。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	◎	注意しており、記録を行っている。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	ちょっとした皮膚のトラブルや血圧などの異常値の場合は主治医や訪問看護師に報告して指示を仰いでいる。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎	把握して希望に沿って受診支援を行っている。	◎			
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	◎	よく話し合い、希望に応じてかかりつけ医を決めて適切な医療が受けられるようにしている。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	◎	通院前や通院後の報告、今後の支援に付いての話し合いを行っている。				
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	◎	暮らしの近況や認知症の症状など詳しく情報提供を行っている。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。	◎	病院の相談員などと連絡を取り合い早期退院が出来るように努めている。				
		c	利用者の入院時、または入院した場合に備えて日頃から病院関係者との関係づくりを行っている。	◎	身の回りの日用品の補充やタオルなどの洗濯、入院前の暮らしぶりなど、要望や質問があれば連絡してくださいと伝えている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	皮膚の移乗や嘔吐、便のたまり具合、微熱や咳き込みなどなど、ちょっとしたことでも訪問看護師やかかりつけ医へ相談している。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	訪問看護ステーションとの24時間対応の契約となっている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	日常的にバイタル測定を行いサインを見逃さないように取り組んでいる。誤嚥が疑われる場合は頻度を上げて測定し早期発見に努めている。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解している。	○	目的はある程度理解していると思うが副作用や用量がどうであるかについては分からない。注意が必要な時には都度に医師から指示を得ている。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	◎	3度の確認を行っている。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	◎	内服後の経過観察を行っている。				
		d	漫然と服薬支援を行うのではなく、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	◎	血圧が高かったり低かったり、便の状態に關していつもとは違う時はかかりつけ医に相談している。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	◎	現段階での意向を確認しながら暮らしの支援を行っている。				事業所として、「看取りについての対応指針」を作成し、利用者の終末期等で事業所での看取りを希望する場合は医師から説明し、同意書にサインをもらっている。事業所では、日常的に医療関係者との連携が密に取れており、終末期や重度化が進行した場合にも、職員は安心して支援ができています。管理者の印象として、「最近では終末期が近づいた時、利用者本人を含めて家族がしっかりとした判断をし、選択ができる方が増えてきていること」を認識しており、事業所としても、利用者や家族に丁寧に情報提供することを心がけている。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけでなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	◎	随時、本人様、家族様とかかりつけ医や職員との話し合いの機会を作っている。	◎		◎	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	◎	職員のストレスにならないような終末期の支援の検討がなされている。				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	◎	本人様、家族様には都度出来る事や選択肢の提供を行って同意や方針の共有を得ている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	◎	状態に応じて都度検討を行っている。栄養補助飲料やエアマット、ギャッジベッドの使用、吸引機の準備も行っている。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	◎	家族様の心情を理解しながら、気持ち良く本人様と過ごして頂くために配慮を行っている。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	◎	年に2回研修を行い学んでいる。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	△	訓練は行っていないが、取り決めに基づき予防や発症後の対応は行われている。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れている。	◎	取り入れ周知されている。				
		d	地域の感染症発生状況の情報収集に努め、感染症の流行に随時対応している。	◎	情報に関心を持ち随時対応している。				
		e	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	取り決めに基づき支援を行っている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅱ.家族との支え合い									
37	本人とともに支え合う 家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	入所時には、ホームの方針として共に支える事をお伝えしている。支援方法に關しての相談や情報交換を行っている。				現在のコロナ禍の感染症対策として、家族等が利用者と直接面会することができないが、事業所ではオンラインを活用した面会のほか、窓やガラス越しでの面会にも対応するなど、できる限り利用者と家族の思いに応じられるよう工夫している。また、事業所として、最近ではフェイスブックやブログなどのSNSをを活用した情報提供にも力を入れており、遠方の家族にも喜ばれている。
		b	家族が気軽に訪れ、居心地よく過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	○	流行病以前はそうであったが現在は地域の情勢に応じた対応を行っている。				
		c	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等)	○	全てではないが、差し入れのおやつと一緒に食したり散歩に出たりする機会を作っている。	○		○	
		d	来訪する機会が少ない家族や疎遠になってしまっている家族も含め、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	月に1回は、家族便りで報告したり、電話【テレビを含む】やブログ、FBを通じて伝えている。	◎		○	
		e	事業所側の一方的な情報提供ではなく、家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して報告を行っている。	○	事あるごとに要望などを伺い実現できるよう努めている。				
		f	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	帰宅願望が強くなることを恐れる家族様に対して粘り強く説明を行い面会を促している。				
		g	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得ようとしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	○	たよりやブログを通じ報告している。	○		○	
		h	家族同士の交流が図られるように、様々な機会を提供している。(家族会、行事、旅行等への働きかけ)	△	COVID19以前はそうであったが現在は地域の情勢に応じた対応を行っている。				
		i	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	入所時や事あるごとに現在のリスクに關してや話し合われた内容について報告している。				
		j	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行っている。	○	礼儀ある応接、またフレンドリーな対応で家族様に対して安心して気軽に話してもらえ環境を作っている。			○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。	○	時間を十分にとり、具体的な例を挙げながら契約内容の説明を行っている。				
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	◎	退去事由については契約書に記載されている。				
		c	契約時及び料金改定時には、料金の内訳を文書で示し、料金の設定理由を具体的に説明し、同意を得ている。(食費、光熱水費、その他の実費、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	◎	得ている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅲ. 地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏域、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	◎	開設時に地域訪問を行っている。運営推進委員は、地域（自治区）の代表者様に代々努めて頂いている。		◎		事業所が開設した当時から比べると、地域住民の高齢化が進んでいるものの、一緒に成長し助け合う関係性が構築されている。日常的に職員は地域住民と顔を合わせており、畑で収穫した野菜を差し入れてくれることも多い。また、法人代表者や管理者家族も事業所に隣接する家屋に住んでいるほか、地元に住んでいる職員もあり、事業所は地域に馴染んでいることを窺うことができた。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。（日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等）	◎	利用者様、職員は屋外で地域の人に出会った時は挨拶が出来ていてフレンドリーである。役員、管理者は地域の自治区の役員や班長を務めている。施設長はじめ事業所役員や職員がその地域に住んでいる。		◎	◎	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	×	過疎地なので減ることはあっても増えることはないと思います。				
		d	地域の人気が気軽に立ち寄ったり遊びに来たりしている。	△	用があれば立ち寄って頂いていますが何もなければ立ち寄ったり遊びに来ることはないでしょう。				
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	◎	出来ている。				
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。（日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援）	×	行なっていない。				
		g	利用者一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	○	地域の中にある自然であったり、人であったり組織であったり、ある資源は活用するように努めている。				
		h	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得ることができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている（公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等）。	○	流行病前は、地域の消防団、消防署、駐在所、小学校との関わりがあったが今は少なくなっている。また、FBやブログを通して利用者様、職員を含め事業所全体の活動を発信している。家族様からは楽しみにしているなどの言葉を頂いている。				
40	運営推進会議を活かした取組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	○	利用者様以外の参加は出来ている。流行病前は一緒にレクリエーションや散歩を行なったりしていた。	○		○	現在のコロナ禍の感染症対策として、集合形式での運営推進会議は実施していない。会議の参加メンバーは、日頃から顔を合わせている家族や地域住民など馴染みの方で構成されており、管理者は、「コロナ禍の状況を見極めながら、できれば以前のように集まりたい」と考え、調整している。会議では、事業所からの現況報告のほか、認知症のことなどを取り上げて一緒に考えたり、福祉行政についての情報提供をしたりするなど、工夫しながら開催されている。また、参加者から発言も多く出され、活発な意見交換ができています。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況（自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等）について報告している。	○	報告はしているが、そもそも認知度や実用性の低い事業なので運営推進会議の議題としては大きく扱っていない。			○	
		c	運営推進会議では、事業所からの一方的な報告に終わらず、会議で出された意見や提案等を日々の取り組みやサービス向上に活かし、その状況や結果等について報告している。	○	課題や取り組みの進捗状況については結果が出るまで報告を行なっている。		◎	○	
		d	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	△	特殊なテーマの場合は必要だとは思いますが、それ以外ではメンバーを変える必要が無いと思います。		◎		
		e	運営推進会議の議事録を公表している。	◎	ホーム内で閲覧できるようにしている。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅳ.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	◎	共通の認識をもち理念を理解し、同じ方向を向いている。				
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	◎	家族様には入所前に伝えている。それよりもその理念の体現によって伝わっていると思う。	○	◎		
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	○	基本的に法人外での研修は必要はないと考えている。何故なら今はインターネットがあるからです。法人内で計画的に研修を行なっている。				事業所では、毎月テーマを決めて研修会を実施し、職員のスキルアップに努めている。研修会の担当は職員の交代制となっており、職員自身が研修内容を検討して開催することで、一人ひとりが主体的に取り組むことができている。また、研修会では講義を職員が一方的に聴講するに留まることなく、グループワークを中心とした実践的な内容も多い。さらに、事業所では、日頃の支援の現場でとっさの時に職員がしっかりと考え、判断ができる力を身につけることができるよう取り組んでいる。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	知識、技術、考え方や態度を基本に日々の実務の中での教育や訓練にあたっている。				
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	世の中の流れを見て、新しい取り組みにチャレンジするようにしている。				
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	○	県の事業所団体に所属、町中での任意団体に所属して情報交換などを行なっている。				
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	日勤帯の3人＋α体制を維持することに努めている。	○	◎	○	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解している。	◎	委員会を設置していてその中で法律を学んだり事例検討をしたりしている。				虐待防止等をテーマに何度も研修会を実施し、職員の理解も深まっている。最近では、スピーチロックに力を入れ指導している。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	◎	朝と夕申し送りを一緒に聴いて状況に基づく助言や職員のとった判断について話し合ったりしている。				
		c	代表者及び全ての職員は、虐待や不適切なケアが見逃されることがないように注意を払い、これらの行為を発見した場合の対応方法や手順について知っている。	◎	全体で学ぶ機会を持っている。			◎	
		d	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	◎	合理的判断に基づく無理のないケアを行うよう指示をしている。				
44	身体拘束をしない ケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	◎	全体で学ぶ機会を持っている。やむを得ない場面自体が起きない取り組みを行なっている。				
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	◎	全体で事例検討会を行なっている。				
		c	家族等から拘束や施設への要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	◎	ある場合は説明している。				

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する 制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解している。	△	長年管理者をしています、そもそもの権限が希薄であると考えます。それはセンシティブな問題で出来れば家族間や行政や司法機関で解決してほしいと考えている。				
		b	利用者や家族の現状を踏まえて、それぞれの制度の違いや利点なども含め、パンフレット等で情報提供したり、相談にのる等の支援を行っている。	△	私たちは民間事業者なので、それを率先して行なうのは私たちではなく行政機関、NPO等の権利擁護団体であると思っています。				
		c	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	×	築いていない。				
46	急変や事故発生時の 備え・事故防止の 取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	○	マニュアルは掲示している。毎年勉強会を行なっている。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	△	訓練は行なっていない。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	事故報告書、ヒヤリハットを作成している。それをもとに全体で検討会を行なっている。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	検討会の中で把握し防止につなげている。				
47	苦情への迅速な対応と 改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	○	殆どの職員は理解している。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	そのような事案が出来ないよう取り組んでいる。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	もしも事案が発生したら手続きにのっとり、透明性を持った事実確認を行い今後の対策、改善を行いたいと思います。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、個別に訊く機会等)	○	契約内容に対する要望や苦情に関しては真摯に耳を傾けないといけません。			○	職員は、気軽に利用者や家族から相談してもらえるよう配慮している。現在のコロナ禍においての感染症対策もあり、面会制限や外出支援など、家族の要望に応えられない場面もあるが、職員は「できる限り対応したい」と考えている。日頃から、管理者は「職員に主体的に考えて取り組むよう、自分たちが運営者だ」という思いを持つよう指導している。訪問調査日の職員への聞き取りからも、職員全員がしっかりと話し合って意見を出し合い、考えを発信するよう意欲的に取り組んでいる様子を窺うことができた。
		b	家族等が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	意見を聞きながら運営体制の見直しは必要だと思います。	◎		○	
		c	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	○	契約時に重要事項説明書の読み上げを行なっていて、その中で情報提供を行なっている。				
		d	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	◎	代表者は現場に居ます。				
		e	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	◎	運営会議の開催。個々の考え方や意見、立案に対するレスポンスを必ず行うように努めている。			◎	

項目 No.	評価項目	小 項 目	内 容	自己 評価	判断した理由・根拠	家族 評価	地域 評価	外部 評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	◎	意義があるのかどうかは別として自己評価を行なっています。				定期的に外部評価を受審していることもあり、評価内容等は運営推進会議の参加者や家族、地域住民にも認知されている。今後、状況に応じてモニター機能も依頼していく予定である。
		b	評価を通して事業所の現状や課題を明らかにするとともに、意識統一や学習の機会として活かしている。	×	この内容では課題を自ら考えた方が利用者様の為になると思うので活かしていない。				
		c	評価（自己・外部・家族・地域）の結果を踏まえて実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	×	自事業所の課題は自事業所が見つけた決定を行い計画立案し事業所全体で取り組んでいる。				
		d	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	×	自事業所で立案した計画については取り組みを知ってもらう上でモニタリングを依頼できたら良いと思います。	○	◎	○	
		e	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	×	自分たちで立案した計画に対してはその成果の確認が必要だと思い取り組みの成果を報告している。				
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。（火災、地震、津波、風水害、原子力災害等）	○	マニュアルの作成、毎年県に報告している。				事業所では、地域の消防団との連携もあり、災害時の訓練についても十分に実施されている。以前は地域との協力体制ができていたが、現在は地域住民の高齢化も進み、想定していたような事業所への災害発生時の支援協力は期待できない状況となっている。また、全国的に風水害が増加し、地域の状況も年々変化していることもあり、事業所としても流動的な災害への備えを強化している。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	主に夜間帯の避難訓練を行なっている。				
		d	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	○	行なっている。				
		e	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	○	消防署の支援をもとに訓練を実施している。	○	○	○	
		f	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。（県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等）	○	共同訓練は行なっていない。ただし、町や地域には災害対策の状況や緊急時に協力出来ることは伝えている。				
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。（広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等）	△	広報活動は行なっている。				以前は、事業所として地域のいきいきサロンを実施し、地域の高齢者などの相談支援もできていたが、現在のコロナ禍において、開催を中止している。利用者との散歩途中に声かけをするなど、サロンの利用者との交流は継続している。また、事業所では、地域住民が集まれる場づくりとして、現在新たな取組を検討している。さらに、事業所として、地域に貢献したい気持ちは強く、「恩返しをしたい」という思いを持っている。今後、さらなる地域の活動拠点などの広がりを期待したい。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	○	流行病以前は、地域のいきいきサロンを開催して相談支援を行なっていた。		○	◎	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。（サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等）	△	事業所ではあるが、そこに住んでいる人が居て、その人たちがそれを必要だとしているということを前提とした活動は必要だと思っています。				
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	△	ジョブチャレンジに協力しているが最近は介護施設への希望が少ないので受け入れていない。				
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。（地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等）	○	その利用者様にとって必要な機関等々に対しては連携、協働を行なっている。			○	